伝説と幻想のインディアン画家

ノーバル・モリソー

一九六二年九月、インディアンの神話をセミアブストラクトに表現した画家が、一夜にして、カナダ美術界の話題をさらった。オジブェ・インディアンのノーバル・モリソー（インディアン名・コッパー・サンダーバード）である。そのときトロントの画廊とホテルで開かれた彼の最初の個展で、四十五点すべての絵画およびスケッチが二日間で売切れた。そしてトロント・グローブ・エンド・メール紙の美術記者パール・マッカーシーは、「後背地たるオンタリオはノーバル・モリソーの作品に素晴しい発見をみた」と興奮し、アメリカの「タイム」も写真入りの記事を載せて、「カナダの美術史の中で、モリソーの展示作品ほど騒がれたためしはあまりない」と書いた。

アトリエでのモリソー

オンタリオ州ベアドモアで生れ、オジブェ・インディアンの伝説を聞いて育ったモリソーは、十代後半になって、これらの民話を絵に再現しようとした。しかし、伝説を文字や絵で表現することに対するタブーは強く、絵をやめて放浪生活を送る。二十六才のときに結核を患い、療養生活を余儀なくされたモリソーは、そこでみた夢に促され、一念発起してまた絵筆をとるようになった。タブーはとけた……。

モリソーが描く世界は彼独自の世界だ。油絵具やアクリルを使って、サンダーバード（雷鳥）や半人半獣、へび、バッファロー、オジブェの神など、夢や伝説上のできごとを、あるいは実在のものを黒と赤を基調に色彩豊かな半抽象画に仕上げる。魚や亀、熊もある。人間対動物、白人対インディアン、男対女、明暗というように、対立するものを並べたパターンが多い。これは彼が生れ育った環境を反映したものだ。同時に、黒い波状の線によってサンダーバードが人間や太陽と結びついているように、自然界のもろもろがお互いに依存し合い、関わり合っている、ということもオジブェ・インディアンの宇宙観からとったモチーフであろう。

正規の学校教育は小学三年生まで、しかもまともに授業を受けたこともなく、他人から絵の手ほどきを受けたことも全くないというモリソーは、夢と伝説の中から独自のファンタジックな絵画を創造した。そして六二年の画期的成功とそれによってもたらされた身辺環境の大きな変化にもかかわらず、今も放浪生活をおくりながらインディアンの生活や体験、信仰などを幻想豊かに描き続けている。彼自身の言葉を借りれば、「かつての誇りある（インディアン）文化の断片をかき集め、わが民族の尊厳と勇気を示し、オジブェの信仰や伝説、神々、そしていろいろな生き物についての私自身の素直な印象を表現するために……。」一九三二年生れ。

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を表わすものではないことをお断わりします。転載の際は出典を明らかにして下さい。なお、ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

東京都港区赤坂七丁目三番三八号
カナダ大使館広報部